令和5年
11
No.103

寺子屋だより

※題字／森川芳聲

碑のこころ

安倍晋三揮毫「至誠」

「萩市椿東 松陰神社立志殿」

※詳しい解説は12頁に掲載しています

もくじ

2 巻頭言『「恥を知る」心を育てる』…山口 秀範
3 教育雑感⑧……白濱 裕
4 偉人レポート……元木 哲三
6 橋を架ける④……占部 賢志
8 チョコクッキーとテキサス男……水崎 之子
9 鳥飼八幡宮ーゆかりの名士たち(第三回)
緒方 竹虎……山内 圭司
10 TERAKOYAふぉとれぽーと
11 〝あちこちde寺子屋〟のご案内
12 碑のこころ(8) 編集余録

巻頭言

「恥を知る」心を育てる

代表世話役　山口 秀範

恥を知る

吉田松陰にいつ頃出会ったのだろう。少年向け偉人伝にあった、下田沖の黒船に乗り込もうとする挿絵に薄らと記憶があるので、恐らく十歳前後のことでしょう。してみると以来、松陰先生の生涯の倍を超える年月、折々に励ましを受けて来ました。現在も毎月社会人向け朝勉強会と、志明館教師たちとの毎週の研鑽会で『講孟劄記』に学んでいます。

先日の輪読箇所は尽心上篇六章・七章「恥」について。「恥の一字は本邦武士の常言にして、恥を知らざる程恥なるはなし」（武士たる者は、日頃の言動のうち恥ずべき点を自覚せぬまま過ごすのが最も恥ずかしいこと）とありました。然も「小人の恥づる所は外見なり。君子の恥づる所は内実なり」と、肩書や身なりよりも自身の心懐やそれに伴う態度・行動を自己点検出来る人こそが本物だというのです。ここを読みつつ新渡戸稲造の『武士道』の中で「恥」について考察した印象的な箇所が思い出されます。

「廉恥心は少年の教育において養成せらるべき最初の徳の一つであった。『笑われるぞ』『体面を汚すぞ』『恥ずかしくないか』等は、非を犯せる少年に対して正しき行動を促すための最後の訴えであった」

かつて親も教師も子供を躾ける基軸に「恥の自覚」を置いていました。団塊の世代が悪ガキだった頃、子供同士で遊ぶうちに諍いが起こって仲間から排除された連中は、悔し紛れに「お前の母さん出べそ」と悪態をついたものです。その言葉――何より大切な母に対するいわれなき侮辱――は決して許されるものではなく、再度喧嘩が始まるのでした。他愛ない思い出ながら、「恥」の感覚を当時の子供達が自然に身につけていた証として忘れ難いものです。「お天道様に笑われる」という表現もこれに類するもので、ある時期までごく自然に受け入れられて来たのです。

迷惑をかけない

ところが何時の頃からか「恥を知る」は死語と化してしまい、それに代わって現代の親たちが多用しているのは「他人に迷惑をかけない」でしょう。我が子がどんな風に育って欲しいかとの問いに多くの父母は「自分のしたい事を見つけて、同時に、人に迷惑をかけないように」との願いを口にします。

この答に接するたびに物足りない思いに襲われます。「迷惑をかけない」ことは世の中のルールとして基本的な一つに違いありません。しかし、迷惑かどうかを相手に決めてもらうというのでは、自己をどう陶冶すべきかという生き方の目標にはなり得ないのです。

例えば電車の座席に座っているあなたの横に泥靴の幼児が乗ってきて足をぶらぶらさせた時、母親は「ダメよ、隣のおじちゃんに怒られるから」と注意するのです。「迷惑をかけない」ようにと躾けるつもりで実は善悪の基準を隣のおじちゃんに委ねることになっていませんか。「あなたの振る舞いは間違っている。お母さんも恥ずかしい」とたしなめる光景には残念ながら近年出会ったことがありません。

教育再生

松陰は『講孟劄記』の別の箇所（公孫丑上篇7章）では次のように語ります。

「恥は人心必有の物なれば、木石に非ざるよりは、恥なきことを得ず。其の恥なきと云ふ者は、真に恥なきに非ず。恥づると雖ども、是を処することなき故に、強ひて恥ぢざるの容をなすのみ」

――木や石ではない我々人間は恥ずかしいと感じる心を必ず持っているものだ。それなのに恥知らずの人がいるのは、真に恥じる心がないわけではなく自身の心と向き合って痛感することを避けて、無理に恥ずかしくない顔を装っているだけだ――と松陰はあくまでも人間の本性を信じて当時の人々を覚醒しようと努めたのです。

翻って現代日本でも大多数は「強ひて恥ぢざるの容をなすのみ」で深層では恥の感覚を失っていないと信じます。特に子供達には「他人に迷惑をかけない」よりも「恥を知って」自らを正す物差しを、その柔らかな心に育んでもらいたいのです。五ヶ月後に迫る志明館開校まで懸案は尽きませんが、今月の親子面接を経て入学してくる「国の宝」たちを待望する思いです。

安政五年に再び野山獄に繋がれる松陰は、松下村塾に遺した詩の最後に「松下陋村と雖も　誓って神国の幹とならん」と、この小さな塾から将来の日本を動かす精鋭の輩出を確信していました。「志明館小校なれど　誓って日本の未来を拓かん」と密かに期する日々です。

60年前に家族で松陰神社参拝の折り
祖母が買ってくれた萩焼の像